

# 相槌のスキル —会話に与える影響—

伊達理英子\* (指導教員 諏訪正樹\*\*)

\*慶應義塾大学 総合政策学部 4年 (2017年3月卒業予定)

\*\*慶應義塾大学 環境情報学部

\*s13544rd@sfc.keio.ac.jp, \*\*suwa@sfc.keio.ac.jp

キーワード: 相槌、マルチモダリティ、身体知

## 1 はじめに

“相槌”と言言に言ってもその定義は実に曖昧である。“相槌”という言葉で誰もが共通して考えるのが、間投詞や頷きだろう。事実、辞書には相槌とは相手の話に頷いて調子をあわせること、とある。しかし、一方で相槌の語源はというと、鍛冶で二人の職人が交互に槌を打ち合わせること、とある。この意味で考えると、相手の視線や息づかいや手の動きなど複合的に相手の反応を捉えて、絶妙な間で槌を打ち合っていることが考えられる。そこで本研究では、単に相槌が間投詞や頷きだけで構成されているのではなく、他の要素も含むと考え、相槌をより多義的に捉える。多様な相槌が他者や会話に対してどのような影響を与えるのかについて観察・分析・考察を行い、私たちが普段無意識的に行っている相槌スキルの解明の糸口を掴むことを本研究の目的とする。

## 2 なぜ相槌に着目したか

研究内容に関係のない話に思われるかもしれないが、発表者は友人から相談を受ける機会が他の人よりも頻繁にあるのではないかと感じる。これには様々な要因が考えられるが、『相槌がうまいね』とひとから褒めてもらうことが多いのは、その要因の一つかもしれない。当の本人はというと、何か意図的に頷きや間投詞を多くしてみようとか、相槌に関して特別のこだわりがある訳でもない。そのため、他人から評価してもらえる『相槌がうまい』という言葉は、単に『頷きと間投詞がうまいね』とされているだけではないように感じる。それらを越えた、私の身体の反応が醸し出す全体的な雰囲気のようなものを指しているのではないかと解釈している。“相槌”を多義的に捉えて、発表者の“相槌のスキル”を解き明かしたいと考える本研究の動機はそこにある。

## 3 分析方法

本研究においては、相槌をより多義的に捉え、頷き・間投詞・表情・姿勢・視線・瞬き・手の動きなどの様々なモダリティに着目することにする。

分析にあたって、上述した言語・非言語の複数のモダリティに着目し、映像分析ソフトウェア ELAN<sup>1</sup>を用いて、各モダリティのアノテーションを付与し、それらの前後関係や同時に起こっているモダリティ同士の関係性などを微視的に記述する。

映像を分析するにあたり、注目するモダリティに即して複数の注釈層を設けた。また、分析結果の考察においては自分の行動の意図や、相手の行動に対する解釈を一人称視点で記述している(諏訪, 2015)。

## 4 データ

今まで合計3種類の映像を収録し、分析してきた。各回、発表者を含む、異なるシチュエーションにおける食事の会話を撮影している。例えば相手との関係性や食事内容や、座席の配置などが異なる。1つめの分析対象は、研究室の同期のAとラーメン店のカウンター席で二人横並びに座っている映像である。2つめは、サークルの後輩Sと居酒屋で対面している映像である。3つめは、研究室の同期のYとファミリーレストランで対面している映像である。

## 5 相槌のスキル

本研究では、相槌のスキルとは、相手の多様性にあわせて、多様なモダリティを駆使して相槌をすることと考える。

これまでの分析により、以下のことが分かってきた。例えば、同期のAと後輩のSに関しては、同調的に語り手の本題に理解を示して、語りを促したり、本題を聞き出そうとする相槌を行っている。一方で、同期のYに対しては、本題を促すというよりは、語り手の多様な言語的あるいは身体的志向を拾って、一緒に本題から離れたたり、再び戻ったりする相槌を行っている。

また、相手との関係性の中で育まれた、会話上での共有された“文化”が存在するということが明らかになってきた。例えば、研究室の同期Yの事例では、“からかい”という共有された文化が存在した。

<sup>1</sup> <https://tla.mpi.nl/tools/tla-tools/elan/>

このような文化をお互いに会話上で共有していることを示し合いながら、どこで“からかいムード”を始めてどこで終わるかというタイミングを見計らうことも相槌のスキルであると言える。

## 6 まとめ

本研究では、相槌が単なる頷きや間投詞だけで構成されているのではなく、多様なモダリティによって構成されていることを個別具体的な事例を用いて微視的に分析し、示している。多様なモダリティとは例えば、視線を中空で泳がせてみたり、上半身の姿勢を変えてみたりすることなどを指す。このようなコミュニケーションの微視的な研究は、人間が普段、無意識的にどのような行為を臨機応変に繰り出しているのかという知の探究(諏訪,2015)において重要である。相槌を見ると分かるように、人間の行為は(発話や頷きという)限られたモダリティだけで構成されているのではなく、複数のモダリティによる動きを複合的に繰り出すことによって構成されているという事が、微視的な分析を行うことによって明らかになる。それらを私達は、物理的環境や話題、相手との関係性などに合わせて臨機応変に繰り出しているのである。

## 参考文献

諏訪 正樹 (2015) 一人称研究だからこそ見出せる知の本質. 諏訪 正樹・堀 浩一 (編著), 伊藤 毅志・松原 仁・阿部 明典・大武 美保子・松尾 豊・藤井 晴行・中島 秀之 (共著) 『一人称研究のすすめ — 知能研究の新しい潮流—』, 3-44. 東京: 近代科学社.